

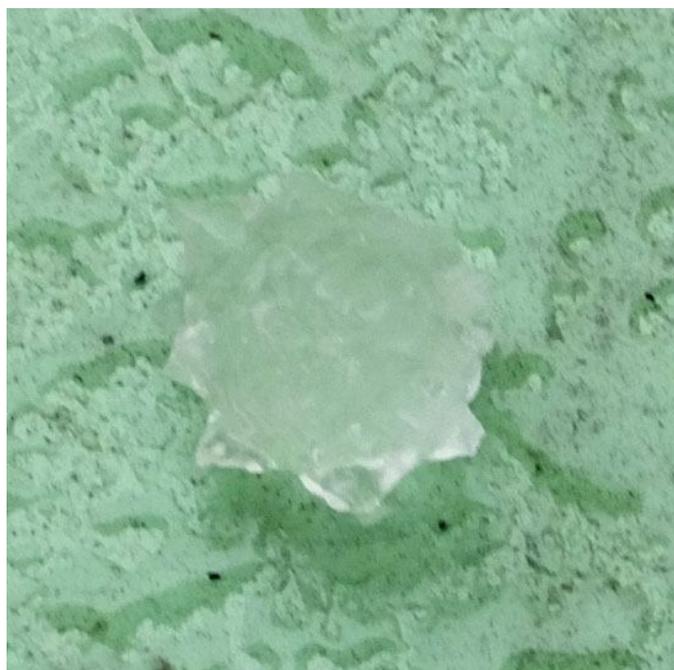
## 「7月18日の雷雨と雹(4)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

雹の結晶には通常、同心円状の構造が見られる。積乱雲の中を何度も上下して成長するからだ。今回降った雹の中にも、不完全ながら同心円状の構造の粒も見られた。下写真がその例で、落下時に割れた雹粒の中心に不透明な核、その周囲にかすかに同心円状の構造が見られる。



しかし、多くの雹粒は下写真のように周囲がゴツゴツしていた。翌日、子どもたちに聞くと、やはり「ゴツゴツしていたよ」「何か、金平糖みたいな形だった」と話していた。私には「機雷」のように見える。どうしてこんな形状の雹が降ったのだろうか？



私は降ったばかりの雹粒をひろって、手のひらで観察してみた。大きさは3cmほどある。どう見ても、中心部から外側に向かって、年輪を描くように成長したようには見えない。いくつもの氷粒が、外側からくっついて、このような形になったように見える。このあと私はこの雹を食べてみたが、口の中で融けてゆく時も、やはりゴツゴツした感触だった。



私は喫茶店の氷を思い出した。水を飲み終わると、小さくなった氷だけが、コップの底に残る。そのまま放置すると、氷同士が勝手にくっついて、一つの塊になってしまうことがある。今回の雹も、この喫茶店の氷のように形成されたのではないだろうか？そこで私は、職場の向かいにある行きつけの喫茶店(ビー玉さん)で、ちょっとした実験をしてみることにした。